



聞く！
語る！
集談
特対

錦帯橋平成の架け替え

●ご出席 錦帯橋建設事務所長 田原 亮治 岩国建築協同組合理事長 村中 巧 社団法人山口県建設業協会会長 藤本 宏司

平成十三年十一月から五十年ぶりの錦帯橋の架け替え工事が始まりました。今回は、この歴史的な架け替え工事の現場で行政の立場から陣頭指揮を行っている錦帯橋建設事務所長の田原亮治さん、昭和二十六・二十七年の架け替え工事に参加した体験をお持ちで、建設関係のまとめ役でもある岩国建築協同組合理事長・村中巧さんのお二人をお訪ねして、社団法人山口県建設業協会の藤本宏司会長がお話を伺いました。

錦帯橋架け替えの技術を伝承できるのは今だけ

藤本／今日は、未来へとつなぐ架け橋というテーマで、錦帯橋の平成の架け替え工事についてお伺いしたいと思います。過去から現在、そして未来へとつなぐ架け替え工

事がどのように計画され行われているのか、そのあたりからお伺いしたいと思います。

田原／錦帯橋のどこが素晴らしいのか、どこに特徴があるのかという、一般の方にはあまりご理解いただけないことも多いんです。江戸時代は一般の人が通れない橋だったし、架橋技術を一子相伝的

にやって、架橋に携わった大工の

お弟子さんが架け替え技術を得ていらつしやった。今まで、第二、第三橋は十三回、第四橋は十五回、そして第一橋と第五橋が九回ずつ架け替えています。それを江戸期から昭和までローテーション的にやってきている。地元の大工さんの間で技術の伝承ができて

参加された経験をお持ちなので、それをいろいろ思い出していただきながら、架け替え技術を後世に伝えていこうということです。

技術の伝承の意味からも、携わる大工さんも六十代から十五・十六歳の茶髪の子たちまで角度を広げて参加してもらおう。その統括管理を村中理事長さんにやっていただいているわけです。

藤本／すごいですね。十五・十六歳で工事に参加できるというのは、田原／「我々が架橋する間はケツを割るな。大きな自信になるから」と言ってます（笑）。メディアが動いて、カメラを向けてもらわれて注目されることもあって、今のところ続いているようです。伝えられてきた技術の重みというのが、だんだんわかってくるんじゃないでしょうか。

一本一本確かめながら



村中／左右で各十五人くらいずつ。西と東に分かれて、互いに競争するような形でやっていました。最後は篠原棟梁がまとめる形でした。今の方が複雑ですよ。昔はこんなにややくしなかったと思うんですが。

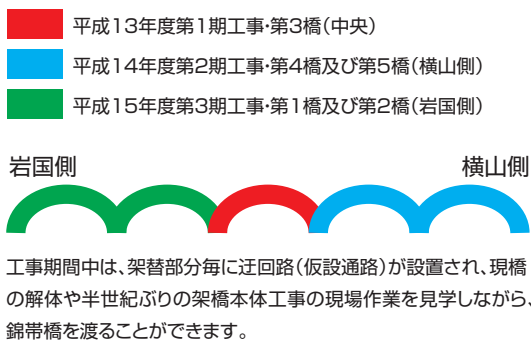


錦帯橋建設事務所長 田原 亮治



村中／だいたい平均二十人ですかね。その時々で多かったです。私も五十年前に工事に携わっています。当時、自分の手でやったことをおぼろげながら覚えていて、思い出をたどりながらやっています。昔はませてましたから、私は十九のときには棟梁で家の二・三軒も建てていた。二十二歳の時にこの工事に入ったんです。途中で足場が崩れて川に落ちて病院に運ばれたこともありましたが、夕方にはまた戻って仕事をしていましたね。

藤本／それは大変だ。若くして歴史的な工事に参加されたわけですね。当時は何人くらいで架け替えを行ったんですか？



昔の技術を解明して 後世へ伝える役目

藤本／この橋の図は、絵的には正確なものなんですか？

田原／そうですね。ただ、これでは材は刻めないで、原寸の型板を作ります。

藤本／やっぱりですね。図面があるなしにかかわらず、いよいよ現物だと。

田原／元禄の図も残ってるんですが、細かい寸法はまったく書いていないんです。そのあたりが何かというと、長年培った経験とカンなんです。大工さんが材のクセを読む、素性を読みながら加工していくのが錦帯橋の技術なんですよ。今ごろはコンピュータのある時代だから、組んでばさつと載せればいいじゃないかといわれるんですが、それは瀬戸大橋などでサルベージを持ってきたガチャンとやるようにはいかないですよ。木を組み合わすんですからね。いくら計算しても合わない。



技術屋としていえば、そこが神秘的でもあるし、それがうまくおさまったときの喜びというのは言葉で表せないほど。

藤本／なんともい

えない魅力でしょうね。

田原／仮想上では計算があるんですがね。

強度計算して作ったものではないので、どうせならこの機会に錦帯橋の強度を解明しておこうという事で、

東大や早稲田の先生方が錦帯橋の強度実験を行いました。力の伝達がどうなっているか、どの材がどういう役目をしているかをぜひとも解明しよう。現実には六十トンの重量をかけて、マックスで二センチ七ミリのたわみでしたね。

藤本／ほう、わずかに二センチですが。

田原／我々も初めて知ったんです。全部で六十トンかける場合と片方にかける場合と実験したんですが、おもしろい動きをするんです。片方に力をかけると、片方がふくらむ。

今、こうしたデータを持ち帰って分析されている。構造的には、一番力のかかるところにケヤキを使っています。その他の構造材は松。これを踏襲しています。

藤本／木の種類はどれくらい使われるんですか？

田原／今の橋は五種類。ケヤキ、松、ヒノキ、クリ、カシですね。第一橋と第五橋の支持柱が松なん



ですが、これが厳しい状況にあるんで、今回水に強いヒバ材に変えることにしました。だから今度は六種類になります。

解体材の活用方法に 議論百出の状況

藤本／昔の材はどう活用するのでしょうか？

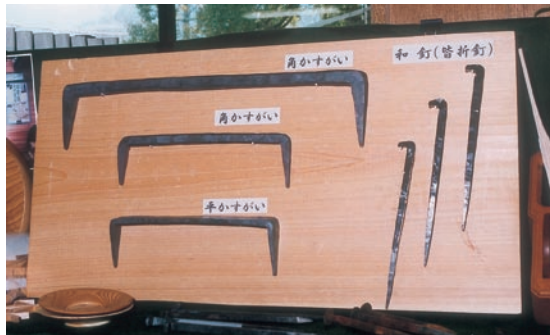
田原／相当量の解体材が出てくるので、なんとか活用しなくちゃいけない。民間で錦帯橋解体材活用協議会を立ち上げて、検討してもらっています。インターネットでオークションをしたらとの意見もあり、いろんな活用方法を検討しています。

藤本／今、廃材でうけているのは、伊勢神宮の廃材を各神社がもらうという形。それから、酒屋の昔の樽を欲しがる人は多い。この辺はほっといてもはけるんですがね。



村中／そういうえば、最近はやわなりましたね。我々が橋を作るころはみんな言ってたんですが。田原／二十種類くらいの名前がありましてね。横からみると算盤の玉のように見える。それでそういう通称がついたんでしょうね。

村中／さっきいわれた古材の活用についても、見るモノによって全然価値観が違う。考えの幅が両極端になっているような気がしますね。好きな人は朝来て、晩もまだあそこに立って、一所懸命写真を撮ってる。五十年前では考えられんことです。それにしても、迂回路をつけたのは大成功だったと思います。



田原／観光協会を始め多くの方々要望もありまして、迂回路をつけたんです。それが新聞等で話題になって観光客が増えたんですね。架け替えの現場を見られるのは今しかない。この前、東京から来られた方たちに、「新しい橋はヒノキの香りがします。渡ると一週間はヒノキの香りがぶんぶんするんですよ」と話しました。

村中／あの香りがね。ヒノキが好きな人にはあの香りはたまらないですよ。木で組む橋だからそうなるんです。

地元の取り組みと 話題性のギャップ

田原／岩国の子どもたちに錦帯橋の素晴らしさをもっと知ってほしいと思って、架け替え工事の見学や記念イベントの資料を地元の小・中・高校に送ったんですが反応が鈍い。地元の岩国小学校と中学校の卒業生が錦帯橋の裏側に名前を書き残すという記念イベントをやったくらいなんです。

藤本／何も残っていないのが普通なのに、ここには現物があるんですから。岩国の人たち、そして私たち山口県人はその辺をもっと自覚しないといけない気がします。この前、全国建設協会の見学会を山口で行ったんですが、

田原／後世に伝えるためには、声を大きくして言うだけではだめ。どういう状況で橋が架かっているかを実際に見せておかねばならないと思います。技術に関しては幅広い角度の大工さんに参加してもらうこと。しかもその後の橋の維持や管理にも携わってもらう。ローテーション的に二十年か二十五年ずつ架け替えていければ、体験しながら技術を伝承していけると思います。

資料的なものも今回整備・解明し、CGで見えることもできるようにしておきます。NHKの「20世紀残したい



錦帯橋は1673年岩国藩主吉川広嘉公によって架けられた天下の名橋。276年もの間、優美な姿を錦川の川面に浮かべていましたが、昭和25年のキジア台風で流失してしまいます。町のシンボルとして愛されてきた錦帯橋の再建に岩国市民はただちに着手し、昭和28年には美しい橋が蘇りました。長く愛されてきた橋だけに、錦帯橋の名称以外にも、大橋、横山渡橋、岩国橋、凌雲橋、帯雲橋、五虹橋、五龍橋、龍雲橋、青海波橋、算盤橋、凸凹橋など、たくさんの呼び名がありました。今回、50年ぶりに行われている架け替え工事は、日本独特の架橋技術の伝承の意味からも大きな関心が寄せられています。

日本の風景」では、中国地方では錦帯橋がトップでした。そうした市民の思いをうまく掘り起こして、地元でもっと盛り上げていきたいですね。

藤本／廃材を利用した錦帯橋の資料館を作るのも良さそうですね。今日はお忙しいなかを、本当にありがとうございます。



昭和25年のキジア台風時の錦帯橋